岐阜キリシタン小史(76)

「戦国の若狭と京極家の女性たち」展を訪ねて－京極マリアの生涯と信仰

前回紹介した豊田市博物館の永青文庫展と相前後して、福井県立若狭歴史博物館で開催された『戦国の若狭と京極家の女性たち　常高院とキリスト教と若狭の 1600 年』を見学した。

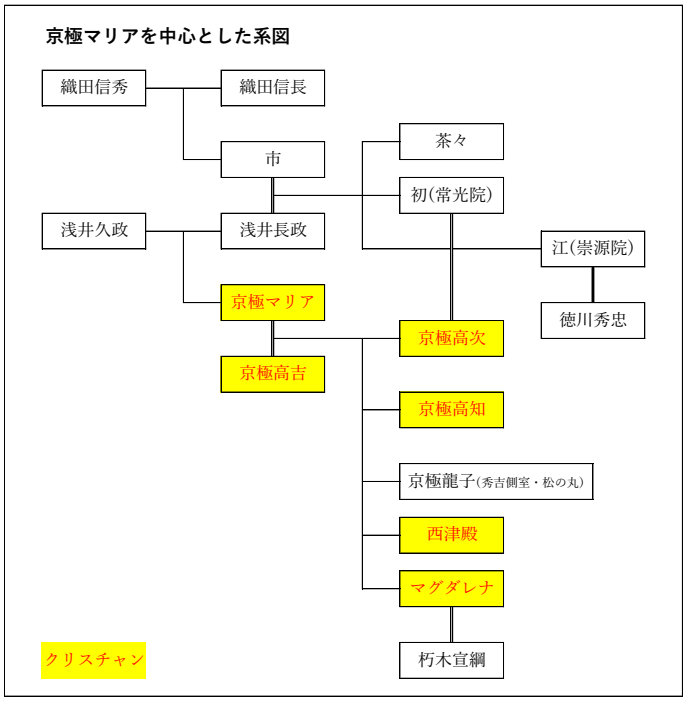


若狭歴史博物館のある福井県小浜市は、古くから奈良との深い結びつきを持つ町でもある。毎年 3 月 2 日に行われる「お水送り」は、奈良・東大寺二月堂の「お水取り」に先立つ神事であり、若狭神宮寺でくみ上げた香水を鵜の瀬から遠敷川へ流し、10 日後に東大寺の若狭井へ届くと伝えられている。若狭と奈良との歴史的なつながりを今に伝える行事である。

また、小浜周辺には羽賀寺や明通寺をはじめとする密教古刹が数多く残り、古くから密教文化が栄えた地としても知られる。これは、若狭が日本海側と畿内を結ぶ交通の要衝に位置し、奈良や京都の大寺院との往来が盛んであったためである。都との結びつきの中で仏教文化が伝えられ、とくに天台宗や真言宗の寺院が各地に建立された。さらに、日本海で水揚げされた鯖を京都へ運んだ「鯖街道」の起点として発展し、豊かな海の幸を都へ送り続けた。

また、江戸時代の蘭学者・杉田玄白ゆかりの町としても知られている。玄白は 1733(享保 18)年、江戸の小浜藩邸で生まれ、幼少期を小浜で過ごした。のちに小浜藩医として仕え、前野良沢、中川淳庵らとともにオランダ語の医学書を翻訳し、1774(安永 3)年に『解体新書』を刊行した。日本の医学史に大きな足跡を残した人物である。

このように若狭は、古代から近世にいたるまで、都との交流を通してさまざまな文化を受け入れてきた土地であった。そして戦国時代には、仏教に加えてキリスト教もこの地にもたらされ、独自のキリシタン文化が花開いた。戦国時代のキリシタン女性と聞けば、細川ガラシャの名を思い浮かべる人が多いだろう。しかし若狭にもまた、キリスト教の信仰を受け入れ、生涯にわたって信仰を守り続けた女性がいた。京極マリア(名前不明、1542 頃-1618)である。



浅井家の姫から京極家の女性へ

京極マリアは、近江の戦国大名・浅井久政の娘で、浅井長政の姉にあたる。織田信長の妹・お市の方とは義理の姉妹であり、茶々(淀殿)、初(常高院)、江の伯母でもある。つまり、彼女は戦国時代の有力武家の女性たちと深いつながりを持つ人物であった。

マリアは北近江の名門・京極高吉に嫁ぎ、京極高次、高知、龍子らの母となった。彼女がキリス

ト教に出会ったのは、夫とともに安土で暮らしていた頃である。1581(天正 9)年、マリアは夫の高吉とともに、安土でイエズス会の宣教師たちからキリスト教の教えを聞く機会を得た。当時の安土では、織田信長の保護のもとでイエズス会の宣教活動が行われており、城下には教会も建てられていた。

しかし、マリアの受洗は、単に宣教師の説教を聞いてその場で洗礼を受けたというものではなかった。フロイスの『日本史』によれば、彼女は禅宗の教えに通じており、イルマン・ロレンソ了斎と 40 日間にわたって教義について問答を重ねたという。霊魂の不滅や死後の栄光と罰などについて質問を重ね、キリスト教の教えを理解した末に、夫とともに洗礼を受けたのである。こうして彼女は「マリア」の洗礼名を受け、後世に京極マリアとして知られることになる。このとき、宣教師たちは彼女の知性と、質問や答えを交わす能力に驚いたと記録している。京極マリアの受洗は、戦国時代の武家女性が、キリスト教の教えに主体的に向き合い、自らの理解と判断によって信仰を受け入れたことを伝える出来事である。

ところが、受洗からわずか数日後、夫の高吉が亡くなってしまう。イエズス会の 1581 年度日本年報によれば、高吉は、まだ洗礼を受けていない子どもが他所から戻り次第、家族全員で洗礼を受けようと考えていたという。しかし、その願いを果たす前に亡くなってしまった。父の死に動揺した子どもたちや家人は、その死を神仏の罰ではないかと恐れたという。一方、マリアは動揺することなく、すべてを神に委ね、信仰を守り続けた。

家族へと受け継がれた信仰

夫の死後も、マリアはキリスト教への信仰を捨てなかった。それどころか、子どもたちにも信仰を伝えようと努めた。当時、すでに豊臣秀吉による伴天連追放令（1587[天正 15]年）が出され、さらに 1597(慶長 2)年には長崎・西坂で日本二十六聖人殉教事件が起こるなど、キリスト教を取り巻く状況は厳しさを増していた。それにもかかわらず、マリアは信仰を守り続け、子どもたちにもその信仰を受け継がせようとしたのである。



京極高次
（1563-1609）

次男の京極高知は 1595(文禄 4)年にすでに洗礼を受けていたが、マリアはさらに長男の高次らの受洗を願って働きかけていた。その結果、高次もキリスト教の教えを受け入れて受洗し、娘の朽木（くつき）マグダレナ(朽木宣綱（のぶつな）[近江朽木氏当主]の室)もまた洗礼を受けた。マグダレナは篤い信仰を持つキリシタンとして知られ、1606（慶長 11）年に京都で亡くなった際には、南蛮寺にて盛大なキリスト教式の葬儀が営まれた。その華やかな葬儀の様子を見た幕府が、キリシタンに対する警戒をいっそう強めるきっかけになったと伝えられている。このように、マリアが受け入れたキリスト教信仰は、一代限りで終わることなく、子どもたちへと受け継がれていったのである。



京極高知
（1572-1622）

また、イエズス会宣教師の報告には、マリアが大坂の人々をキリスト教へ導くための働きにも力を尽くしたことが記されている。大坂では、宣教によって 900 人を超える人々が受洗していたが、そのなかでマリアは、貴人たちの改宗を助けた女性として名前を挙げられている。彼女が単に自分自身の信仰を守っていただけではなく、周囲の人々にもキリスト教を伝えていたことを示す貴重な記録である。武家の女性という立場を生かし、家族や周囲の人々に働きかけながら、信仰を広げていたのである。

若狭から丹後へ―祈りの晩年

京極マリアの生涯を考えるうえで、もう一つ注目したいのが、晩年の信仰生活である。

関ヶ原の戦いの後、長男の京極高次は若狭・小浜藩主となり、次男の高知は丹後・宮津藩を領した。すなわち、若狭と丹後の両国は、ともにキリシタンであった京極兄弟によって治められていたのである。

マリアは京極家と深い関わりを持ちながら、晩年には丹後国泉源寺村（現在の京都府舞鶴市泉源寺）に移り住んだ。そこは京極家ゆかりの地であり、マリアは小さな庵で祈りと読書の日々を送ったと伝えられている。俗世を離れた生活のなかで、祈りや黙想に励み、キリスト教の教えへの理解を深めていった。読書の際には、イエズス会が出版した『どちりいな・きりしたん』をはじめとする教理書や祈祷書、聖人伝などのキリシタン版を用いて信仰を養っていた。

マリアは 1618（元和 4）年 8 月 20 日、泉源寺村で生涯を閉じた。

キリシタン女性史のなかで

京極マリアの生涯をたどると、キリスト教の歴史を担ったのは、宣教師やキリシタン大名だけではなかったことに気づかされる。

戦国時代から江戸時代初期にかけて、多くの女性たちがそれぞれの立場でキリスト教を受け入れ、家族や周囲の人々に伝えていた。細川ガラシャがよく知られている一方で、京極マリアもまた、武家の女性としてキリスト教を受け入れ、その信仰を生涯にわたって守り続けた一人である。

とりわけ印象深いのは、夫の死後、家中に動揺が広がるなかでも、彼女自身は信仰を捨てなかったことである。そして、その信仰は子どもたちへと受け継がれ、大坂のキリシタンたちへの働きかけにもつながっていった。



京極マリア像
（京都府舞鶴市）

細川ガラシャのように広く知られた女性だけでなく、京極マリアのような女性にも目を向けることで、戦国時代のキリスト教史は、より豊かな姿を見せてくれる。

若狭と丹後の地に生きた京極マリア。彼女の生涯は、戦国の動乱や時代の変化のなかにあっても、一人の女性が自ら選んだ信仰を守り続けた歴史である。

1618(元和 4)年にその生涯を終えてから、すでに 400 年以上が過ぎた。細川ガラシャの陰に隠れがちな存在ではあるが、京極マリアもまた、キリシタン女性史のなかで、もっと語られてよい人物であろう。 ✝